

## 金正喜の肖像

一

昨年（二〇一二年）はたまたま学会参加の途次、ウィーンの美術史美術館でデューラー（一四七一〜一五二八）やホルバイン（一四九七、八〜一五四三）、クラナッハ（一四七二〜一五五三）の肖像画展を、ソウルの韓国中央博物館では THE SECRET OF THE JOSEON PORTRAITS と題された展覧会を見る機会に恵まれた。真夏にもかかわらず秋の終わりを思わせる冷気のなかで見たデューラー以下の肖像画にも圧倒されたが、それに劣らぬ感銘を「阮堂先生海天一笠像」（図1、同展図録）から受けた。その深い精神性の再現に、阮堂金正喜（一七八六〜一八五六）が生きてそこに立っているかと思われたほどである。この肖像はそれまでに何度も写真で見ているかと思われたもの、真



図1

蹟の印象はまた格別だった。

むろん、金正喜の作品に触れる機会がそれまでもなかったわけではない。二〇〇五年の春に韓国を初めて訪れたさい、鄭珉氏に導かれて潤松美術館で趙熙龍（一七八九〜一八六六）を「発見」したが、その師匠すじに当たるのが金正喜だった。また同年夏の嶺南

大学校における日韓美学研究会のさいにも、大学の博物館で金正喜の大字の書を見かけた記憶がある。さらに同年秋にも權寧弼先生にお連れいただいた Choi Sunu House の一室には、金正喜の「梅竹水仙齋」という扁額（図2）がかかっていた。權先生にはさらに潤松美術館にもご案内いただいて、春に続いて秋の「蘭竹」展を見ることができ、趙熙龍作品ともども金正喜の蘭竹を心ゆくまで堪能した。そういうことが重なって、翌年、大田の韓南大学校を交換教員として訪れたさいには、金正喜故宅に案内していただくという厚遇を受けた。そこには多くの柱聯がか



図2

高橋博巳



図3

かっついて、たとえば「凡そ物皆な取る可き有り」（図3）という一句など、いまに忘れることができない。そのとき「歳寒図」の絵皿をお土産にいただいで、邇來、研究室の机の向こうには金正喜が鎮座している。また二〇一〇年には鄭珉氏に連れられて、ソウルの BOOK MUSEUMで『秋史と燕行』（二〇一〇年）と題する図録を入手した。このような経緯を経て、肖像に相對していたく感銘を受け、ようやく『阮堂全集』を繙くに至った次第であるが、全貌の把握にはほど遠く、小論では正喜の「実事求是」の姿勢がどのような可能性を開いたかを試論的に検討することしかできなかった。せめて金正喜の魅力の一端なりとも開示できれば幸いである。<sup>1)</sup>

## 二

金正喜については、姜在彦氏の『朝鮮儒教の二千年』（朝日選書、二〇〇一年）に要を得た言及があり、ご存知の方も多しと思われるが、ここで簡単に要約すれば、正喜は朝鮮実学派が解体した十九世紀前半の一八〇九年、燕行使の副使だった父金魯敬にしたがって北京を訪れ、阮元（一七六四〜一八四九）や翁方綱（一七三三〜一八一

八）などと交流して金石学を修め、漢代の石碑に残された隷書に基づく書体を学んで、書道史に「秋史体」という書法を切り拓いた。さらに成均館の大司政だった正喜は、朱子学と考証学のあいだに壁をつくらず、「実事求是」を唱えた点でも特筆されている。ところが一八四〇年以来、濟州島に九年間、北青に二年間の謫居生活を余儀なくされて、北学派の経世思想を發展させることができなかった。そのかわりに金石文の考証と書画の制作に集中せざるを得なかったわけである。また禅学にも関心を示し、草衣大師意恂（一七八六〜一八六六）とも禅と茶を通じて親交があった。人格と思想の継承ということでいえば、李尚迪（一八〇四〜一八六五）と姜璋（一八二〇〜一八四四）の二人の門下の存在が注目される。「歳寒図」は前者のために描かれ、後者は北学思想を近代開化派につないだ先覚者の一人と姜氏は位置付けている（同書、四〇六〜七頁）。

調査に取りかかった頃、金正喜研究の必読文献として安大会（成均館大学校）・金時徳（高麗大学校）両氏より、藤塚鄰『清朝文化東傳の研究―嘉慶・道光學壇と李朝の金阮堂―』（国書刊行会、一九七五年）の教示を得た。本書によつて今となつては知り得ない多くの事実を教えられ、小文の行論に関係するかぎりでも参照させていただいたことを初めに感謝をもつて記しておきたい。

以上の予備知識に加え、全集巻頭の「阮堂金公小伝」から若干の補足をすれば次のようにならうか。

金公正喜、字元春、号阮堂、又た秋史と号す。慶州の人なり。母兪夫人、懷娠二十四月にして生まる。寔に正宗丙午なり。性孝友にして、群書を極む。純祖己卯、生員試に中たり、己巳、第に擢らる。



図4

「正宗丙午」は、正祖十年（一七八六）。「純祖己卯」は純祖十九年（二八一九）に当たり、正喜は時に三十四歳、「己巳」はそれより遡つて純祖九年（一八〇九）、正喜は二十四歳で、この年に「生員」すな

わち科挙受験の資格を得て、十年後に科挙に及第したわけである。それ以後、官は「説書」を振り出しに、「大司政」を経て「兵曹参判」に至った。しかし「七世の祖諱弘郁」が孝宗甲午の年（一六五四）に天子に逆らつて獄死し、「名臣」となつてから、

大官赫赫として、門甚だ盛んなり。父判書諱魯敬、毅然として気度有り。禍に遭いて島に竄斥され、公働して生きることを欲せず。夜は必ず泣いて天を呪いて寝ず。寒暑、裘葛を易えず。判書公、四載にして始めて宥されて還る。衣も亦た四載にして始めて改む。是より先、判書公、燕に使いし、公も随いて入る。時に年二十四、阮閣老元・翁鴻臚方綱、皆な当世の鴻儒、大名海内を震う。位は且つ顕れ、軽しく人と接せず。公を一見して莫逆たり。

というように代々、劇的な人生航路を歩むのが一族の運命だったようだ。「気度」は気象。「竄斥」は追い退けられること。父が「禍」すなわち罪を得て島流しになったとき、正喜は「慟」すなわち身を震わして歎き、生きる意欲も失つて、「裘葛」は皮衣と葛かたびらで、寒暑にかかわらず衣替えも廃して、「四載」四年後に赦されてからやっと着衣を改めたというのである。しかしその前に、燕行使となった父に従つて二十四歳の若さで北京に赴き、「阮閣老元」阮元・「翁鴻臚方綱」翁方綱と「莫逆」すなわち意気投合した。言うまでもなく、この二人は「当世の鴻儒」で、その名前は全国に轟き、簡単に面会も出来ないほどの「頭官」だった。いよいよ帰国するに当たっては「贈秋史東帰詩」と題する詩画卷が作られ、朱鶴年が描いた「勝會」の画には、阮元をはじめ李鼎元（一七五〇～一八〇五）らの姿が認められる（図4、「燕行、世界への道」実学博物館図録、二〇一〇年）。

そうした幸福なコインの裏側として、一族の運命は金正喜を例外と

せず、不運が牙をむいて襲いかかったのである。

憲宗庚子、獄起こり、詞は公に連なつて、緹騎蒼皇、公の為に憂うる者咸な汹懼す。公の挙止は他日の如し。吏に対して辨析中竅、峻整明白の氣、以て日星を薄くす可くして、金石を貫く。公を媚嫉する者と雖も、拮据して執る所無し。卒に済に投謫されるを免れず。済は古の耽羅なり。瀛海其の間に在り。甚だ鉅にして、又た風多し。人涉、恒に旬月を計う。公の方に涉らんとするや、大風濤中に霹靂を作し、死生俄かに忽ぶ。舟中の人は皆な魄を喪い、抱号す。篙師も亦た股票、取えて前まず。公、凝然として柁頭に坐し、詩有りて高詠すれば、声は風濤とともに相上り下す。因りて手を挙げて某所を指して曰く、「篙師、力めて柁を挽いて、此こに向かえ」と。舟は乃ち疾す。朝に発し、夕に済に至る。済の人太いに驚き、以謂らく飛渡すと。謫舎に居す。遠近、笈を負う者、市の如し。纔かに数月、人文大いに開け、彬彬として京国の風有り。耽羅の荒を開くは、公より始まる。（中略）

哲宗辛亥、権相国敦仁、礼論を以て斥けらる。斥くる者は謂う、「公も実に之れに与る」と。北青に遷さる。時に公の年六十六。二弟も亦た老いて白首たり。公の手を握り、慟哭して言う能わず。戚党故吏、目瞠瞠、啜泣悲泣して、哭声墻屋を撼かす。公、色を正して、仲季を顧みて曰く、「庸人、論するに足らず。讀書、君が輩が如き者も亦た是くの若きか」と。且つ談笑し、且つ慰む。手ずから書篋を整え、井井如たり。丙辰に卒す。寿七十一。

「憲宗庚子」は一八四〇年、時に正喜は五十五歳、「獄」が起こつて濟州島に流された。「詞」は訴訟。「緹騎」は赤い着物を着て、宮中の警護にあたる役だったが、のちに罪人を捕らえるのを任務とした。

「蒼皇」は慌てるさま。「汹懼」（洶懼）は恐れて不安に思うさま。周囲の人々はみな心配したが、正喜だけは普段と変わらず、「峻整」は厳かできちんとして、その気魄たるや「日星」の光も薄くし、「金石」を貫くかと思われるほどだった。「媚嫉」は媚びること。「拮据」は攻撃材料を集めること。「済」は濟州島、「古の耽羅」である。「霹靂」は激しく鳴り響く雷。「抱号」は抱き合つて泣き叫ぶこと。「篙師」は船頭。「股票」は恐れ震えること。船頭さえ震えているのに、正喜は「柁頭」船先に坐つて行く手を指示したところ、わずか一日で濟州島に到着し、島人は「飛渡」したかと驚いて迎えた。こうして正喜のもとには「笈」を負うていたる者が門前に「市」をなし、わずか数ヶ月で「人文大いに開け、彬彬として京国の風」があつたという。あたかも佐渡島における世阿弥（一三六三？～一四四三？）のような感化を遺したのであろう。

ところが「哲宗辛亥」一八五一年には、「権相国敦仁」に連座して「北青」に流された。ちなみに「相国」宰相の「権敦仁」（一七八三～一八五九）には、正喜と合作した「山水図」などが伝わっている（図5、高麗美術館蔵）。時に「六十六」歳の正喜の謫居生活を心配した「二弟」も「慟哭」して言葉にならないのを、正喜は厳肅な面持ちで、普通の人はともかく読書人の君までこのありさまとは言つて、普段と変わることなく穏やかに「談笑」しつつ、みずから文箱を整理し静かに旅立ったという。「戚党」は一族、「故吏」はもとの役人。「瞠

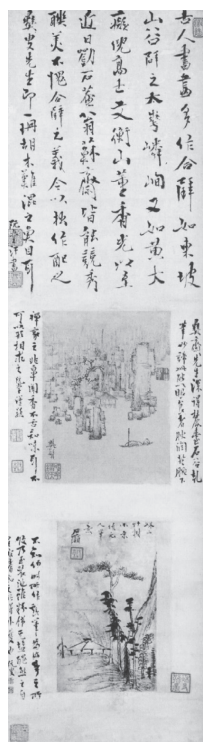


図5

「瞠」は目を見張ること。「啜泣」は、すすり泣くこと。「井井如」は清く静かで整然としている様子。

「七十一」年の生涯において、ふだんは「公、甚だ清軟にして氣宇安和、人と言いて、謫然として各おの歎を得」という状態だったが、話題が「義理」に及ぶと、「議論、雷霆劍戟、人皆な寒からずして栗す」という状態になったと伝えられている。「雷霆」は、かみなり。「議論」の激しさに人々はたじたじとなって、寒くないのに鳥肌が立ったという。学問は「百家の書」から「十三經」まで至らざるはなく、もつとも「易」に通じ、

金石・図書・書・詩文・篆隸の学、其の源を窮めざること有ること無し。尤も書法を以て天下に聞こゆ。嘗て「実事求是説」を著して曰く、学問の道、既に堯舜周孔を以て帰と為せば、則ち必ずしも漢宋の界、朱陸薛王の門戸を分かつ。但だ平心静氣、篤学力行のみ。蓋し公の経学、惟だ聖人の旨に合うを以て、本と為す。

と伝えられている。正喜は「実事求是」こそは「学問最要の道」であるが、「晋宋以後、学者務むるに高遠を以てし、孔子を尊び、以為らく聖賢の道は是くの若く浅近ならずと。乃ち門逕を厭薄して、之れを棄つ。別に超妙高遠の処に之れを求む」というふうになったという。「門逕」は入門の手がかり。「厭薄」は嫌って軽んじること。しかし正喜は、「学を為すの道は、必ずしも漢宋の界、朱・陸・薛・王の門戸を分かつ。但だ平心静氣、篤学力行」を努め、「実事求是に徹する」という態度だった（『阮堂先生全集』一）。「朱陸」は朱熹（一一三〇～一一二〇〇）と陸九淵（一一三九～九二二）。朱熹は性即理を、九淵は心即理を唱えた。「薛王」は薛瑄（一二三九～一四六四）と王陽明

（一四七二～一五二八）。前者薛瑄は明の程朱学者で、後者は心即理説を継承して陽明学を唱えた。しかし先に姜在彦氏の説明にもあったように、正喜はそうした違いに拘泥せず、「聖人の旨」に合うことを基本としていた点が注目される。

### 三

二百数十に達する号の一つ、秋史を取って「秋史体」と呼ばれた書については軽々に論じることができないので、便法を取りたい。正喜は「申威堂（観浩）に与う」第三書簡でこう述べている。申観浩（一一八二〇～一八八）は門下の一人。

石庵の書法、亦た詩家の漁洋の如し。天分、人に過ぎ、寔に撫擬し難し。且つ未だ其の真蹟を見ず。只だ其の拓本に就いて閱過するのみ。尤も手を下し難し。其の墨を行るも、他と大いに異なり、深く坡公の墨法を得たり。其の墨を停むる処、突起して黍珠の痕の如き有るに至る。坡公の墨は即ち此くの如し。東人、筆を行ると雖も、墨を行るを知らず。心眼の何を以て此に及ぶや。概ね其の書は専ら坡公従り来たり、自ら一門を闢く。清以後の書家、何義門・姜西溟・汪退谷・陳香泉諸人の若き有り。磊落相望む。石庵の書は当に巨擘為るべし。之れに過ぐる者有れば、董玄宰以後の一人に衍る。如し学び得んと欲せば、先ず坡書に之れを求むるを妙と為す。且つ真蹟を見て然る後、亦た議し到る可し。

（『阮堂先生全集』二二）

「石庵」は劉墉（一七一九～一八〇四）の号。字は崇如で、初号木庵を石庵に改めているところを見ると「木石」を意識したか。乾隆十六年の進士で、官は礼部尚書・吏部尚書、太子少保。詩文をよくし、書においては帖学派の大家として知られた。正喜はここで、その重要性

が詩の分野の「漁洋」王士禛（士禛とも）（一六三四～一七一）に匹敵すると述べている。士禛は阮亭とも号し、神韻説を唱えて、一代の正宗と仰がれた、康熙年間を代表する詩人である。「撫擬」は臨書すること。「黍珠」はキビのかたまりで、墨痕の盛り上がった部分の比喩。「東人」は朝鮮の人。石庵の書法は「坡公」蘇軾に学んで、以下に列挙されている「清以後の書家」の中では傑出していたというのが正喜の評価だった。

「何義門」何焯（一六六一～一七二二）は康熙四十二年に举人となり進士に挙げられて、官は武英殿修書に至り、藏書数万巻、校訂に長じて『義門讀書記』六巻を著した。

「姜西溟」（一六二八～九九）の名は宸英、号は湛園。康熙三十六年に七十歳で進士となり、翰林院編修を授けられた。詩や古文を善くして、書法に通じた。

「汪退谷」（一六五八～一七三三）の名は士鉉、字は文升。康熙の進士。詩と古文に巧みで、書法を善くし、姜宸英と並び称された。

「陳香泉」（一六四八～一七〇九）の名は奕祺、字は謙六（六謙とも）。貢生で、官は南安知府。書と詩に巧みだった。

これら錚々たる顔ぶれからして、翻って石庵の書法への傾倒がいかに深かったかが理解される。この点では神田喜一郎博士の『中国書道史』（岩波書店、一九八五年）にも、

乾隆時代になると劉墉があらわれた。この人もおなじく董其昌から出て蘇軾を加味し、その筆意において両家をしのぐばかりの超妙な域に達し、渾然として玉のごとき書風を完成した。

（二四八頁）

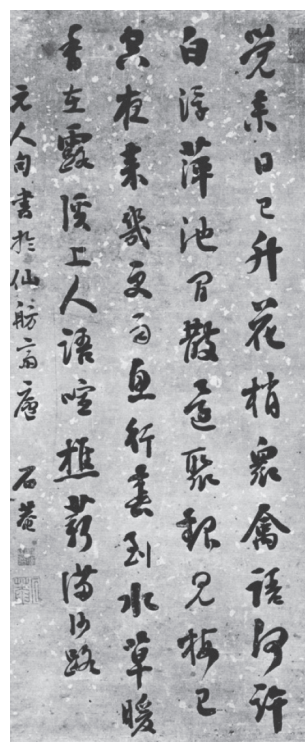


図6

というような高い評価が見え、さらに張照（一六九一～一七四五）とともに「董其昌以後における帖学の最高峰」とも記されている（図6）。「董玄（元）宰」は董其昌（一五五五～一六三六）、元宰は字、号は思白。諡を文敏といい、万曆十七年の進士で、官は南京礼部尚書、太子太保。書画を善くして、その著『画禅室隨筆』はよく知られている。だがなによりも驚くべきは、正喜のこの石庵への確信に満ちた評価が「真蹟」を見ないで行われていることである。

また、「樞彝齋（敦仁）に与う」第三十三書簡では、鄭板橋（一六九三～一七六五）の「蘭幀」を鑑定して次のように述べているのも興味深い。便宜、二段に分けて引用する。

鄭板橋の蘭幀、是れ原筆に似たり。敢えて確定せざるは、板橋の蘭は、皆な筆墨蹊径の外に於いてし、別に妙諦を具う。絶えて画意無し。高帽蘭盆図の如き、見る可し。帽蘭、一筆の画意に似たる無し。蹊径を以て尋ね覓む可からず。純ら撇法を以て之れを為す。此れ是の其の平生、人に長じ、人は以て近似するを得ず。

此の幀、頗る画意を具う。横放を極むと雖も、蹊径尋ぬ可し。人も亦た略を以て干めて力を着くことを得れば、亦た復た近似

す。且つ其の筆勢は恣肆にして忌むこと無ければ、亦た佳ならざるに非ず。帽蘭に題する所を以て対看すれば、恣肆を極むる中に、亦た渾円簡穆の意有り。此の幀は但だ恣肆なるのみ。又た其の印章も、皆な其の自刻。幀蘭に款する所は半壊の板橋印なり。神趣特に此の幀の両印に異なり。皆な自刻に非ず。反つて尙氣有り。是の数端を以て、敢えて其の真を確定せず。(下略)

(同上、三)

「板橋」は鄭燮の号で、乾隆元年（一七三六）の進士。各地の知県として善政を布く一方、墨竹・蘭石を善くして「揚州八怪」の一人としても知られている。正喜はここで板橋の「蘭幀」と「高帽蘭盆図」とを比較している。「蹊径」は扱るべき道、方法、メソッド。板橋の「蘭」は、こう描けばこうなるというような決まり切った手法では描かれていない。別に「妙諦」すなわち奥義、秘訣があるという。それは「画意」とは異なるもので、そのような意図は微塵もない。「撇法」は片仮名のノの字のように左下に払う書き方。「高帽蘭盆図」はそうした書の書き方で描かれている。ところがこの「蘭幀」には「画意」が認められ、「横放」勝手気ままな描き方ではあるが、「蹊径」を追跡することができる。もし真似ようとすれば、「近似」の作品ならば作れそうだが。「恣肆」は勝手気ままな様子。「渾円」は天体のようにまん丸で角がないこと。「簡穆」は簡素で温雅な様子で、「高帽蘭盆図」にはその二点が備わり、両者の違いは歴然としている。しかも落款はすべて自刻であるはずが、「蘭幀」には「半壊」の印が捺され、「神韻」どころか「尙氣」すなわち俗で下品となれば、「真蹟」であるはずはないが、そのように断定しないのは正喜の敦仁に対する心遣いであろう。

こうした持論を展開する一方で、正喜はみずから蘭を描いていた。その正喜の「蘭」を二〇〇五年秋の「蘭竹」展で目の当たりにしたこ

とはすでに記したとおりである。掲出の「蘭図」（図7）には、

此れ瘦式を為す。蘭を写すの最も難きは、格を得る者なり。居士

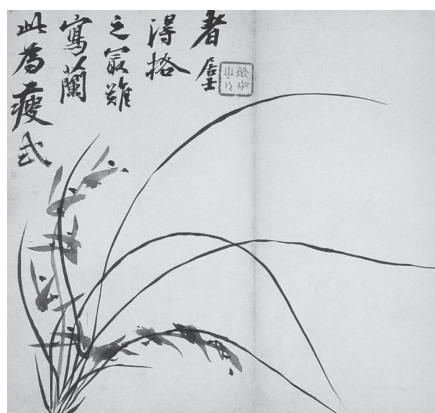


図7

「韓国美術蒐選」（東大出版会、一九七八年）が説くところによれば、正喜の「燕京」体験が「国家的訓練と見識」を得させ、「彼自身の人となり、そして学問が彼の作品をして文人画の神髄に達せしめた」のだという。そして「歳寒の竹庵図」などと並んで、「ソウル個人所蔵の不作蘭図、同じくソウル個人所蔵の竹庵図」などが、「その禅味ある幽玄な脱俗は李朝の他の画家の到底追隨できる境地ではない」と絶賛されている（図8、9）。そうした見方からすれば、正喜が「趙熙龍の畫聯に題す」に次のように記したのも無理からぬことのように思われる。

近頃、乾筆儉墨を以て、強いて元人の荒寒簡率を作す者は、皆な自ら欺き、以て人を欺くなり。王右丞・大小李將軍、趙令穰、趙承旨の如きは、皆な青緑を以て長を見す。蓋し品格の高下は、跡に在らずして、意に在り。其の意を知る者は、青緑泥金と雖も、亦た可なり。書道も同じく然り。

(巻六)

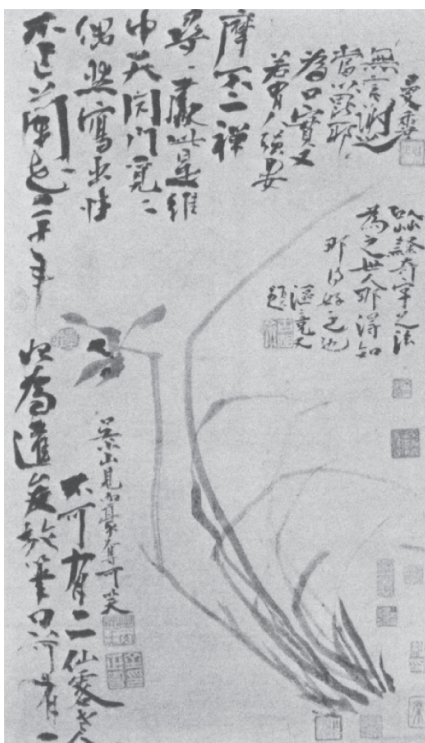


図9



図8

「乾筆」は穂先を乾燥させて書くときだけ墨を含ませる筆。「儉墨」は乏しい墨で、かすれたような描き方。元代の画に見受けられる「荒寒簡率」は、単なる「乾筆儉墨」では模倣さえ無理だといっているのである。王維（六九九／七〇一〜七五六／七六一）は唐の詩人画家。官が尚書右丞に至ったので、王右丞と呼ばれた。李思訓（六五三〜七一八）は雲麾將軍右武衛大將軍だったので大李將軍と呼ばれ、金壁青綠山水が名高い。李昭道（生没年不詳）は李思訓の子で、將軍ではなかったが小李將軍と呼ばれた。我が浦上春琴（二七七九〜一八四六）は『論画詩』において、「唐代の大小李、之れを北宋の祖と為す」と記している（天保十三年刊本）。趙令穰（生没年不詳）は北宋の画家、蘇軾に学んで墨竹に優れる。趙承旨（一二五四〜一三三二）は元の画家、趙孟頫のことで、官が翰林學士承旨だったことに拠る。これらの画家がみな「青緑」や「泥金」といった派手な作品においても高い「品格」の画を描いたので、「乾筆儉墨」で外面だけ似せようとしても「意」がなければ意味がないと趙熙龍の画を批判したものと解される。先ほどの春琴も、

胡元、高士多く、意興、画図に寄す。或いは謂えらく、元は宋に勝ると。此の語意に虚ならず。元人は奇逸を貴び、形似に拘らわれず。故に筆墨の外に於いて、超然として韻に余り有り。

と述べているが、これらの点について今はこれ以上立ち入る準備がなく、改めて趙熙龍を取り上げるさいに考察したい。

正喜の見解としてより注目されるのは、満洲に出自をもつ詩人画家について、権敦仁宛て第十五書簡で次のように述べた部分である。

臞仙、名は永忠、一字渠仙。又の字は良輔。貝勒弘明の子なり。



輔国將軍。「延芬堂集」有り。

嵩山、名は永憲。康親王崇安の子なり。

樗仙、名は書誠。字は実之。又の字は子玉。奉國將軍。「静虚堂集」有り。

素菊道人、名は永璣、字は文玉。又の字は益齋。輔国公弘晋の子なり。「清訓堂集」有り。

二十年前、曾て鈔有りて、満洲の王公貝勒諸人の詩画名勝なる者存す。原巻を京第に搜し覓めしむるも、何処に落在するかを知らざるなり。鈔目の敗紙一二片、蠹篋に有る者、之れを検すれば、四人は皆な録存有り。亟ち更に鈔を為して、呈上せん。此れ亦た墨輪の転ずる所にして、預め湊会する所有るか。覚え、奇甚だしく、快甚だしきことを。四人は、詩画俱に絶勝にして、大江南北の諸人に減ぜず。陸飛・嚴誠と至交を為す。陸・嚴は皆な江南の高士、曾て一人とも妄交せず。而るに此の四人に至りては、之れと契を結ぶ。則ち四人は皆な知る可きなり。臞・樗二仙の詩、江南七子に下らず。恨むらくは未だ原巻を得ず。即ち呈覽を為さん。四人輩の翰墨の盛、洪湛軒の入燕の時に在りて、湛丈は陸・嚴と爛曼たるも、皆な此れらの輩の人有るを知らず。之れが為に咄咄たり。東人の燕に入りて交遊の盛んなるは、毎に先ず湛軒を称し、而るに其の翰墨の小事に於いては、是くの如く疎甚だし。又た何をか此れより大なる者を論ぜんや。徒だ湛軒のみに非ざるなり。朴楚亭の如きと雖も、到る処で錯過す。人をして嗟惜嗟惜せしむ。満洲人の忽せにす可からざるもの有るは、塞曉亭・夢文子・英夢堂・英夢禪諸人有り。皆な竜の如く、虎の如く、方物す可からざるのみ。「画徵録」・「画林新詠」は、蒐羅頗る富めるも、若かる四人なる者有るも、一も採るを見ざるは何ぞや。

(同上、三)

「臞仙」は清の宗室の出身で、封は鎮国將軍。詩画に精通したと伝えられている。「貝勒」は満洲および蒙古出身者の爵号のひとつ。爵は、親王・群王・貝勒・貝子・鎮国公・輔国公の六等に分けられた。「嵩山」は不詳ながら、父の「崇安」は友竹主人と号し、王羲之・献之父の書法を習って妙を得たと伝えられている。「樗仙」は名、書誠。輔国將軍。「素菊道人」(一七二二〜一七八七)には「益齋集」が伝わる。いづれも書・詩に優れた人々で、正喜は「絶勝」非常に優れたものと絶賛している。わけても注目されるのは、「陸飛・嚴誠」と「至交」すなわち親交を結んだという一事である。この二人は誰とでも軽々しく交際するような人ではなかったので、これら四人の詩人たちと意気投合したということが、とりもなおさず重要な詩人であることの証明になるといえるのである。とりわけ臞仙と樗仙の詩は、「江南七子」の作と比べても遜色がないとされている。その「七子」とは、王昶(一七二五〜一八〇七)・王鳴盛(一七二二〜一七九七)・錢大昕(一七二八〜一八〇四)・吳泰來(？〜一七八八)・曹仁虎(一七三二〜一七八七)・趙文哲(一七二五〜一七三三)・黄文蓮(生没年不詳)の七人である。

しかし洪湛軒が入燕したとき、陸飛や嚴誠たちとは「爛曼」というのは明らかに交流したことかと解されるが、臞仙以下の四人とは没交渉だった。「咄咄」とは事の意外なのに正喜が驚いたということ。湛軒が「疎」であったばかりでなく、「朴楚亭」齊家もまた「錯過」すれ違つて、正喜を「嗟惜」残念がらせている。「満洲人」を軽視できないのは、「塞曉亭」・「夢文子」・「英夢堂」・「英夢禪」といった人々がいるからだとして、これら「竜」や「虎」に比すべき逸材を、「方物」区別し名づけることもできないと正喜は絶賛するのであるが、これらの人々について私は寡聞にして名前すら目にしたことがなく、いま調べる手立てもない。あれだけ網羅された「画徵録」や「画林新詠」に誰一人として採られていないのはどうしたことであろうかと正

喜も記しているほどで、いずれにしても正喜の偏見に囚われない公平な姿勢は見事というほかはない。

ところで、陸飛（一七一九？）や巖誠（一七三二～六七）と満洲詩人の「至交」の様子は、次のような巖誠の詩によつて確かめることができる。

鎮国將軍招飲園亭、余与筱飲皆大醉、次日筱飲画苦齋図贈之、綴以二詩、余亦次韻題其後。（鎮国將軍、園亭に招飲さる。余は筱飲と与に皆な大酔す。次日、筱飲は苦齋図を画き、之れを贈る。綴るに二詩を以てす。余も亦た次韻して、其の後に題す）

東風愁逼棟花時 東風愁い逼る 棟花れんかの時  
有約追飲共一卮 約有り 追飲 一卮を共にす  
入座賓朋情澹宕 座に入る 賓朋 情は澹宕たり  
庄檐藤竹影參差 檐を庄する 藤竹 影しんし參差  
漫曠街鼓旋相促 漫りに街鼓を曠り 旋しほしば相促す  
即吐車茵豈見疑 即ち車茵を吐き 豈に疑を見んや  
彷彿紅蘭高致在 紅蘭に彷彿として 高致在り  
野夫心折百篇詩 野夫心折れたり 百篇の詩に

丁子花香最有情 丁子の花香 最も情有り  
曲闌軟幔態低橫 曲闌軟幔 態低橫  
已驚物候他鄉得 已に驚く 物候の他郷に得るを  
轉覺春愁一夕生 轉た覺ゆ 春愁の一夕に生ずるを  
狂興不辭樹大斗 狂興 辭せず 大斗を斟むを  
帰途都忘隔巖城 帰途 都て忘る 巖城の隔つるを  
今朝写入丹青裏 今朝 写し入る 丹青の裏

丁子の花香 最も情有り  
曲闌軟幔 態低橫  
已に驚く 物候の他郷に得るを  
轉た覺ゆ 春愁の一夕に生ずるを  
狂興 辭せず 大斗を斟むを  
帰途 都て忘る 巖城の隔つるを  
今朝 写し入る 丹青の裏

猶記名園側帽行 猶お記す 名園に帽を側そばてて行くを

（『鉄橋全集』巻一、ソウル大学校蔵写本）

「鎮国將軍」は臆仙を指し、「筱飲」は陸飛である。陸飛と巖誠は臆仙に招かれて「大酔」し、翌日、陸飛が描いた「苦齋図」に付した詩に次韻したのが、この七律二首だった。「東風」春風は愁いを伴いつつ、「棟花」おうちの淡紫色の花が咲く初夏に連なっていた。「追飲」は楽しみを尋ねること。「一卮を共にす」は盃を酌み交わすこと。「賓朋」は賓客。「澹宕」はのどやかなこと。「參差」は入り交じるさま。「街鼓」は京師で朝夕に打った鼓。「車茵」は車の敷物。「紅蘭」の句の下には、「康熙の間の宗室、玉池生は又た紅蘭主人と号し、詩に工なり。嘗て郊島の詩を刻して、寒瘦集と名づく」という割注がある。「郊島」は唐の詩人、孟郊（七五一～八一四）と賈島（七七九～八四三）で、「郊寒島瘦」はもと蘇軾の評語だった。「彷彿」はさながら。「高致」は気高い趣き。「百篇の詩」の下には、「時に苦齋吟稿を出して、坐客に示す」と割注があり、この「苦齋吟稿」に「野夫」すなわち巖誠の「心」は挫けたというのである。

二首目の「丁子」はジンチョウゲ。早春、香り高い花をつける。「曲闌」は曲がった欄干。「軟幔」は柔らかなカーテン。「態」はありさま。「低橫」は低く垂れる。「物候」は四季折々の風物。季節の移ろいを「他郷」で感じて、「春愁」が一晩で生じ、「狂興」気まぐれから「大斗」大盃をも辞さず、「帰途」は「巖城」によつて厳しく「隔てられ」ているのも忘れて酔ったのである。帰宅して改めて「丹青」に昨日のことを描こうとして、「名園」のなかを「側帽」すなわち帽子を傾けて歩む、おそらくは「鎮国將軍」のことをまざままと思い出すというのである。あるいは自分の姿であろうか。

このように陸飛や巖誠はともかく、正喜が満洲出身の文人に親近感を感じていたことに今は注目したい。これは「小中華」を標榜してい

た少し以前には、考えられないことだったろう。洪大容がその存在に気付かなかつたばかりか、朴楚亭までがことごとくすれ違っていたとしても、彼らを責めるわけにはいかない。それほど正喜のこの判断は画期的だったと言える。このような開かれた姿勢があったればこそ、次章でみるように日本の文人への関心も寄せられ、それがやがて深い共感に変わったものと思われる。

## 四

正喜の「人を懐しむ詩体に仿う。旧聞を歴叙して、転じて和舶に寄す。大板浪華間の諸名勝、当に之れを知る者有るべし。十首」というタイトルを持つ詩には大勢の日本人の名前が見え、中には意外な人名も含まれている。第一から順番に見て行こう。

説経何奇特 経を説いて何ぞ奇特なる  
 曾見伊物書 曾て見る伊物の書  
 後出加遼密 後に出でて遼密を加う  
 仁斎未是疎 仁斎未だ是れ疎ならず  
 且須平心看 且に須らく平心に看るべし  
 一切門戸除 一切門戸を除いて

「奇特」は飛び抜けて優れていること。「伊物の書」は伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）と荻生徂徠（一六六六～一七二八）の書物。「遼密」は精密さ。まさに後生畏るべし、「後」に続く人はそれまでの説に「加上」して学問は展開してゆく。ことに「仁斎」に対する好評価が目を引き、正喜の「門戸」に囚われない開かれた態度が本物だったことの証しとなる。朱子学が陽明学かというようなレベルをはるかに超えた判断だからである。

精里儘老学 精里（古賀樸一割注）侃く老学  
 遠溯洛閩余 遠く洛閩に溯る余り  
 因之及我邦 之れに因りて我が邦に及ぶ  
 節要退溪書 節要退溪の書  
 筆法亦淳古 筆法も亦た淳古  
 想必其人如 想うに必ずや其の人の如し

「老学」は老学究。「洛閩」は程・朱の出身地によって程朱学を指す。「退溪」は李退溪（一五〇一～一七〇〇）、李朝中期の朱子学者で、江戸初期の儒学界にも影響を与えた。『朱子書節要』二十卷などがある。一八一一年に最後の通信使を迎えたさい、古賀精里（一七五〇～一八一七）は『李退溪書抄』十巻を正使金竹里に贈呈している。「淳古」は質朴で古風なこと。ここでは「筆法」とともに、人格までが称賛されている。末句の下には、「余が斎に精里の対聯有り」と割注があるので、正喜も精里の書を通信使を介して入手していたことが知られる。

邇来和人文 邇来和人の文  
 頗愛篠本廉 頗る愛す篠本廉  
 解脫文字陋 解脫す文字の陋  
 瓣香八家拈 弁香八家を拈む  
 紙鳶取放妙 紙鳶放妙を収め  
 古董義理嚴 古董義理嚴なり

「邇来」は近頃。「篠本廉」は篠本竹堂（一七四三～一八〇九）、廉は名で、井上金峨（一七三二～一八四）の門人。竹堂は「文字の陋」を脱して、自在に自然な漢文を綴っていたという。「弁香」は形が花卉に似た香。禅僧が祝福するさいに用いたので、人を喜び迎える意で用い

る。「八家」はいわゆる唐宋八大家で、韓愈（七六八～八二四）や柳宗元（七七三～八一九）らを指す。正喜は詩の末尾の割注に、「和人の文体、篠君大いに旧習を変ず。『紙鳶』・『古董』の二文、皆な篠の作、大いに典則有り」という高い評価を記している。いまや日本文学史上でも忘れられた篠本竹堂の文業が、ここでは燦然と輝きを放っている。正喜は「雑識」のなかでも、

今、東都の人篠<sup>(たけ)</sup>四本廉の文字三篇を見る。弇陋僻謬の習いを一洗す。詞采煥發、又た滄溟の風格を用いず。中国の作手と雖も、以て之れに加うる無し。噫、長崎の舶、日と中国と呼吸相注ぎ、絲銅貿遷は尚お第二に属す。天下の書籍、海輸山運せざる無し。

（巻八）

と、竹堂について言及している。「弇陋僻謬の習い」とは王世貞（一五二六～九〇）の号、弇州山人によって古文辞派の形式的な文体。「滄溟」はもう一人の古文辞派のリーダー、李于鱗（一五一四～七〇）の号。おおむね陳腐と貶される古文辞派末流の形式主義を脱却し、「中国の作手」に勝るとも劣らない文章がどうして綴れたかと言え、ば、「天下の書籍」が「長崎」にもたらされていたからだというのである。正喜にとっては「絲銅貿遷」すなわち「絲」や「銅」の貿易よりも「書籍」の流通のほうがはるかに大事だったようだ。

俊逸三宅邦

俊逸三宅邦

超拔出等夷

超拔等夷を出づ

航航説古義

航航と古義を説けば

下士大笑之

下士大いに之れを笑う

声聞遂不及

声聞遂に及ばず

海雲渺遠思

海雲遠思渺<sup>はる</sup>かなり

「俊逸」「超拔」と絶賛された「三宅邦」は、三宅橘園（一七六七～一八一九）である。皆川淇園（一七三四～一八〇七）門下で、『助語審象』（文化十四年、一八一七、刊）の著者として知られるが、文化八年に対馬に赴いて最後の通信使と唱酬筆談し『鷄林情盟』（文化九年刊）をまとめていたことは、今回初めて知った。「等夷」は仲間、同輩。「航航」は剛直なさま。「下士」は無教養な人。そういう輩は「古義」に関心をもつはずもないと、正喜は橘園に同情している。「声聞」名声は海を越えず、「海雲」海上の雲に隔てられて、「遠思」遠くを思い遣るといふ、この主語はむろん正喜である。

なお『橘園遺文初集』（嘉永三年刊）巻末に載る「三宅橘園先生小伝」には弟晋の筆で、

幼にして穎敏、八九歳にして詩を賦し和歌を詠じ、十三歳に至りて文詩六百余首有りて、輯めて冊と為し、自ら之れが序を作る。又た孝経・中庸の解、論語・礼記の拔萃、儒学論の論定：皆な少年の著作に係る。先生の学は概ね漢人の訓詁に拠り、宋儒の窮理に偏執せず。断然として夙に發明する所有り。斯の道を以て、己が任と為し、二千年の流弊を矯めて、洙泗の旧に復さんと欲す。

というふうには、早熟な少年時代の修学の様子が記されている。「洙泗」は洙水と泗水、孔子の故郷を流れる川で、儒学の原点を意味する。

天明戊申、京師に遊び、竜草廬を訪う。其の経義を講ずるに、意に満たざる者有り。居ること幾ばくならずして還る。享和壬戌、再遊す。時に皆川淇園先生、開物の学を唱え、海内に鳴る。即ち

往きて謁す。其の精論要義、古今に亘り百家を統ぶ。其の説、先に發明する所の者と合す。乃ち之れに師事して益すます古道を闡明し、其の蘊奥を究む。遂に帰郷の念を絶ち、垂帷教授す。

というように、「天明戊申」八年（一七八八）、一旦は童草廬（一七一四〜九二）に従学したものの満足できないで帰郷し、あらためて「享和壬戌」二年（一八〇二）「再遊」して皆川淇園に従学した。その理由が、少年時代の「説」と淇園の「開物の学」とが合致したからというのほなかなか豪儀である。そこへ「文化辛未」八年（一八一二）「韓使来朝」のことがあって、対馬に出かけて「筆談唱和」し京師に帰ると、「名声、四方に藉甚」となって、「来たりて業を受け門籍に登る者、貴戚縉紳より凡そ一千余人」だったという。

文晁妙画諦 文晁 妙画の諦  
 恰似董思白 恰かも董思白に似たり  
 淋漓善用墨 淋漓 善く墨を用う  
 烟翠濃欲滴 烟翠 濃やかにして滴らんと欲す  
 流観名山図 名山図を流観すれば  
 富士在几席 富士は几席に在り

「文晁」は谷文晁（一七六三〜一八四〇）で、「妙画の諦」とは名画の真髓を意味する。「董思白」は董其昌。「淋漓」は勢いのある筆使いで描かれた滴るような墨色。「烟翠」は靄にかすむ山の緑。「流観」はざっと目を通すこと。原注に「余は文晁画一幀を蔵す。又た名山図有り」とあるそうなので、正喜は『日本名山図会』を見ていたのであるうか。いづれにしても富士を好んで描いた文晁は、理解者を海彼の知識人のなかにも得ていたわけである。

唐以前旧文 唐以前の旧文  
 尚今在足利 尚お今に足利に在り  
 拙古破体書 拙古破体の書  
 恰是齊梁字 恰かも是れ齊梁の字  
 誰知百濟時 誰か知らん百濟の時  
 還復我之自 還つて復た我より之れ自るを

「足利」は室町時代に創設された儒学の学校で蔵書で知られた。下野国（栃木県）足利にある。「拙古」は飾らない古ぶり。「破体」は王獻之（三四四〜三八八）の書体で、王羲之（三〇七〜六五）の行書の変体。原注には「足利学校所蔵の古書は、齊梁の金石に似たり。百濟の時に購ひ去る者なり」と見える。

七経与孟子 七経と孟子と  
 考文析楼細 考文析楼細  
 昔見阮夫子 昔見る 阮夫子  
 嘖嘖歎精詣 嘖嘖精詣を歎す  
 随月楼中本 随月楼中の本  
 翻雕行之世 翻雕して之れを世に行う

「七経と孟子」は『七経孟子考文』を指し、山井鼎（一六八〇〜一七二八）の撰。伊予西条藩主の命で足利学校に出向き、根本遜志（一六九九〜一七六四）とともに『詩経』以下の古典籍を校合して百九十八卷にまとめ、幕府に献じた本をさらに荻生北溪（一六七三〜一七五四）が校訂して、享保十六年に『七経孟子考文補遺』として刊行された。同書は清朝の中国に伝えられ、嘉慶二年（一七九七）元阮の序文を付して刊行された。詩中に見える「阮夫子」がその元阮である。

「嘖嘖」は賞賛の声。末尾に付された割注には、「余、中国に入るや、阮芸台先生に謁す。盛んに『七経孟子孝文』を称す。揚洲随月読書楼の本を以て、板刻通行す」と記されている。

隋唐残本書

隋唐残本の書

中国之所遺

中国の遺す所

並収佚存中

並びに収む佚存中

片羽亦珍奇

片羽亦た珍奇

嗟哉孝経注

嗟哉孝経注

同帰梅頤偽

同に帰す梅頤の偽と

「佚存」は林述斎（一七六八〜一八四二）撰の『佚存叢書』で、日本に残存する『古文孝経』などを収録している。「片羽」は不詳。梅頤（梅蹟とも）は晋の人で、「偽古文尚書」の作者。清の閩若璩（一六三六〜一七〇四）の『古文尚書疏証』によって偽書とされた。

篆刻有漢法

篆刻漢法有り

精雅兼葭堂

精雅兼葭堂

古梅御油烟

古梅油烟を御し

直欲抗程方

直ちに程方に抗せんと欲す

借問長崎舶

借問す長崎の舶

西梅翰墨光

西梅翰墨の光

「篆刻に漢法有り」とは、秦漢の古法に溯ること。「精雅」は清らかな上品なこと。「兼葭堂」の篆刻は福原承明（一七三五〜一七八）の都合わせ、南玉（一七二二〜一七〇）以下の通信使に贈られた。その『東華名公印譜』（宝暦甲申三月、一七六四年）を正喜も目にしたのであ

ろう。「古梅」は奈良の墨の老舗、古梅園。「油烟」は樹脂を不完全燃焼させて生じた炭素粉で、墨の原料となる。古梅園製の墨は、「程方」すなわち明の程君房と方于魯の墨に匹敵するというのである。程・方両氏には、それぞれ『程氏墨苑』と『方氏墨譜』が伝わっている。原注には「顧西梅洛、曾て商船に従いて長崎に入り、画法大いに和人に貴重とさる」と記されているが、来舶清人「西梅」については不詳。「翰墨」は筆跡。

人見和泉守

人見和泉守

頼以金索伝

頼いに金索を以て伝わる

蘇米斎中老

蘇米斎中の老

斤斤說齋然

斤斤齋然を説く

海天理旧夢

海天旧夢を理む

廻首三十年

回首三十年

「人見和泉守」は藤原重次で、元祿の頃の鑄物師。原注に、「余、嘗て製鏡を以て、中国諸名士に分贈す。馮晏海、並びに収め金索古刻中に刻す」と見える。「馮晏海」は『金索』中に「日本国竟九面の図」を載せ、そこには「皆な葉東卿の得る所、拓本を以て貽らるる者」と記されているようだ。「蘇米斎」は翁方綱の号。「斤斤」はかしこまつて。「齋然」（九三八？〜一〇一六）は平安中期の僧、九八三年に入宋、大蔵経五千卷を将来した。「海天」は海上の空。「旧夢」は昔見た夢のような過去。「回首」は回想すること。

こうして正喜は朝鮮通信使を介して日本事情に触れたばかりでなく、かつて出かけた北京でも元阮や翁方綱から日本のことを聞き及んで、親近感を増幅させてきたようだ。満洲出身の詩人画家の作品や、日本の文物への公平な態度は、「実事求是説」の帰結と見なすことが

できるのではなからうか。

### 注

(1) 金正喜の引用はすべて『阮堂全集』（影印標点韓国文集叢刊）301に  
拠る。

(2) 拙稿「清朝文人の魅力」（『太平詩文』半百記念号、太平詩屋、二〇一  
一年）、および「十八世紀東アジアを行き交う詩と絵画」（『蒼海に交わ  
される詩文』東アジア海域叢書13、汲古書院、二〇一二年）、「通信使  
行から学芸の共和国へ」（『日本近世文学と朝鮮』アジア遊学163、勉誠出  
版、二〇一三年）を参照。

(3) 以下、原注の引用は、2章に挙げた藤塚鄰『清朝文化東傳の研究―嘉  
慶・道光學壇と李朝の金阮堂―』一三六頁以下に拠る。

〔後記〕小論はもともと、二〇一二年に濱下昌宏氏の退休記念論集の  
ために、縁ある人々が論文を持ち寄る一篇として執筆したものである  
が、こうした大勢の執筆者による原稿がすべて揃うのは難しいようで  
荏苒と歳月が流れて今日に及んだ。そうこうしているうちに私自身も  
退休の年を迎え、現役最後の仕事となった国際日本文化研究センター  
の共同研究の成果である「兼葭堂が紡ぎ、金正喜が結んだ夢」のほう  
が先に刊行の運びとなった（笠谷和比古編『徳川社会と日本の近代化  
―一七―一九世紀における日本の文化状況と国際環境』思文閣出版、  
二〇一五年三月刊）。その後、記念論集そのものは電子媒体でとりあ  
えず公になるとのことなので、遅ればせながら紙媒体でも発表するこ  
とにした。論文は言ってみれば生ものではあるが、如上のような事情  
であえて執筆時のままとしたので、前記拙稿と多少の重複があるのは  
諒とされたい。あわせご批正を賜れば幸甚である（二〇一五年三月三

十一日記）。

〔追記〕なお小論は科学研究費助成事業（基盤研究(B)）「公共知の形  
成―東西比較による18世紀学の展開」（課題番号…2232002  
5）の助成を受けたものです。